
存在秩序

キルグサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

存在秩序

【Nコード】

N7701V

【作者名】

キルグサ

【あらすじ】

ありとあらゆるものの存在意義を形成する情報群のバランスを保つという“存在秩序”、その研究をしている科学者の抹殺を依頼された笹倉ハイヴは、前代未聞の科学兵器の完成を阻止する事となった。説明不足、矛盾点、誤字脱字など多いので悪しからず……。

一幕

「で、何の用だ？」

先程、ここへ来た若い女性と軽い世間話を終え、俺は本題に入ろうと、そう尋ねた。

ここはある田舎町の小さな公園だ。そこにある木でできたベンチに俺と女性は並んで座っていた。ベンチの他にブランコ、すべり台、ジャングルジムが設置されていて、子供達が楽しそうに遊んでいる。今は休日の昼時で、緩やかな時間が流れていた。穏やかな風が公園を囲う並木の葉を小さく揺らす。

隣の女性は黒い長髪に涼しげな白いワンピースを着ていた。俺に言わせれば少し無防備すぎる。舐められているのかな、とも思う。

「存在秩序って、知ってる？」

女性は俺を見ず、まっすぐ向いたまま、独り言を呟くように言った。本当に独り言なんじゃないかと迷ったが、

「いや、知らない」

と、返した。

「簡単に言つと、ありとあらゆるものの存在意義を形成する情報群のバランスを保つ秩序のこと」

簡単に理解の難しいことをさらっと言った女性に聞き返す。

「つまり、何だ？」

女性は、公園で追いかけてごっこでもしているのか走り回る子供達を楽しそうに目で追いながら微笑んでいる。

「とにかく、そういうものがあるの」

女性はこちらを向いて俺を見た。さっきまでの微笑みは消え、無表情にこちらを見据えている。改めて女性の顔を見たが、銀色に透き通った瞳が印象的な、かなりの別嬪さんだ。

「今回、貴方に依頼したい仕事はその存在秩序の研究をしている科学者の抹殺」

何故？ と、聞きたくなるが、多分いつも通り答えてはくれないだろう、今は。必要なのはイエスか、ノーだ。そして俺はいつも通りの質問をする。

「その見返りは？」

女性は少し間をおいてほほ笑む。

「報酬はいつも通り、貴方の自由よ」

小型旅客機に女性と二人きりで、公園のベンチに並んで座っていたように、並んで座席に座る。シートの座り心地は快適だ。ここで寝ると言われても文句は無い。

「あんたもついて来るのか？」

隣の女性は、びしっとしたスーツ姿。公園で合った時よりずっと大人びて見える。

「ええ。貴方をサポートするのも私に与えられた任務の一つ」

「そりゃ御親切にどーも」

「私、名前はシイノ、よろしく」

そう言っただけでシイノは眼鏡をかける。

「俺は……」

「笹倉ハイヴ、でしょ。前任者から色々聞いてる」

「そうか」

自己紹介で名前を先に言われてしまった俺はそう言っただけで、ため息が出た。

シイノは持参した革のバックから書類をいくつかの書類を取り出す。

「じゃあ、仕事の内容を説明する。目的は前にも言った通り、存在秩序の研究をしている科学者の抹殺。抹殺対象の科学者の名前はレイゲル・ポーグラフ。これが彼の顔写真」

シイノからその写真を受け取る。頭髪は無く、髭が長い。東洋系の顔立ちに沢山の皺が刻まれている。科学者というよりは仙人みただ。

「けっこう、年配の方だな」

俺の感想を無視して、シイノは話を進める。

「面倒な事に、彼はネットに作り上げた仮想現実の中で研究をしている。その仮想現実のあるサーバーは見つけたのだけど、彼の居場所はつかめていない。というか、居場所を転々としながら、その仮想現実のサーバーにアクセスし、研究を進めている。それよりも厄介なのがKGBの後ろ盾があるということ」

「ちょっと待て、ロシアのKGBは一九九一年に解散されたはずだ
俺はそう口を挟んだ。

「それは表向きの話。裏向きには暗部として残っている」

シイノはそう口を挟まれるのが当然のことのように淡々と答える。

「そのKGBが何故、存在秩序の科学者を？」

「現KGBの主な活動は諜報と兵器開発。そして、レイゲルは存在秩序を崩壊させる実験を行っている」

俺はシイノが言っていることの真意がよくわからなくて黙っていると、

「つまり、KGBはレイゲルを利用して存在秩序を崩壊させる兵器を作っている。貴方にはこれを阻止して欲しい」

シイノはそう補足した。

「その、存在秩序が崩壊するとどうなるんだ？」

「大抵の場合、人間は発狂し、自殺する」

「どうやって、存在秩序を崩壊させる？」

俺はさつきから質問してばかりだ。

「音で。超低周波音のある周波数領域に存在秩序を崩壊させる効果があるということ。レイゲルは発見した」

「その音が発生させる兵器を作っているのか」

シイノは頷きながら書類をいくつかめくり、

「そういうこと」

と、簡単にそう言っただけだが、本当にそんなことが可能なのか？ という疑問が生まれた。そもそも、

「その存在秩序は本当に存在するののか？」

「ええ、存在する。それを実感することは難しいけど、確かに私達一人一人に存在秩序がある」

「音で発狂や自殺つてのは？」

「実験済み」

そう言つて、シイノはバックからまた書類を取り出し、

「これ、レイゲル博士の論文“存在秩序とその崩壊”。気になるなら後で読んでみて」

その論文の書かれた書類を俺に渡す。

「じゃあ仕事内容の話に戻るけど、まず、私とその仮想現実のあるサーバーに直接アクセスして、レイゲルの居場所を探る」

「その居場所を聞いて、俺はレイゲルを殺しに行くと」

「ええ、そう。内容は以上」

シイノは書類を鞆にしまうと、眼鏡を外した。

ようやく小型旅客機が発進した。旅客機が発進と同時にあくびをしたシイノはあっという間に寝てしまった。この危機感の無さには呆れ果てる。やっぱり俺は舐められているのだろう。

俺はかつて、彼らに追われていた。何もしていないのに、国際指名手配にもされた。だがあるとき、彼らは手の平を返し、俺に仕事を持ちかけてきた。俺にしか出来ない仕事だと言つて。彼ら、シイノを含むその組織に名前は無い。その名も無き組織は科学技術の急激な進歩を阻止する事を目的とした一般には知られていない、いや、知られてはいけない影の組織だ。

俺はナノマシンのよる細胞レベルでのサイボーグ化に成功した唯一の生物兵器だ。だからこそ、俺は彼らに追われた。危険な存在として。まあ、それとこれとはまた別の話だ。

俺はフライト中の暇な時間にシイノから受け取ったレイゲルの論文“存在秩序とその崩壊”に目を通す。

二幕

そこは初めて訪れるスラム街だった。サーバーはそのスラムにある教会にあるらしい。

そのスラムには人が多く、ゴミも多かった。けして良い生活が出来るとは思えないその場所で人々は暮らしていた。だが、不思議とここの人々は他のスラムに見るような絶望の表情が無い。スラムの市場では人々が賑わっている。

市場には拾ったゴミやガラクタ、盗んできた野菜や果物、蠅のたかる肉や溝臭い魚などが、それぞれに並べられている。麻薬が平然と、そして堂々と売り出されているのも目にした。ここでは金のやり取りは殆ど行われず、大体が物々交換で成り立っていた。ガラクタとガラクタを交換する若者達、肉を渡して野菜を受け取る小さな娘、自分の息子と引き換えに麻薬を貰う夫婦……。

そんな市場を抜けて、目的の教会にたどり着く。木でできた、ぼろぼろの教会。あちらこちらに適当な補強がされているが、今にも崩れそうだ。

「貴方、宗教は？」

そう言ってシイノは教会の中に入る。

「いや、何も」

俺は無神論者だし、宗教にはこれっぽちも興味が無い。

教会の内部のちょうど中心の辺りに蛇の頭をした石像があり、その石像を囲むように座り込んで、瞑想している人が何人かいた。

「あの石像よ」

シイノはその蛇頭の石像を指差した。

「あれが？」

「ええ」

「よくわかったな」

聞き慣れない言葉を聞いて、瞑想していた何人かが、不思議そう

によそ者を見つめる。

「簡単よ。だって、科学とは縁もゆかりもないこの土地で情報を送受信しているんだから。上手く隠したつもりが、逆に仇になっただけ」

そう言っつて、着ているぼろいマントのフードから顔を出すと、長い髪をかきあげて、石像の臍の辺りに額を当てる。教会にいる人達の注目が集まる。

「シイノ？」

呼びかけても返事はない。石像に額をくっ付けたまま動かない。

不意に殺気を感じて、後ろを振り返ると、銃器を構えたまま教会の中に入ってくる若者が……七人。教会にいた人達は何が何だかわからないといった様子で辺りを見回している。若者達はそんな、教会に居る人達の事などお構いなしに、一斉に銃弾を撃ち出し始めた。静かな教会は銃声と悲鳴が響き渡る混沌へと豹変する。

額を石像に付けたままのシイノを引っぱって、石像の裏へと回る。

「何するの！」

「わかるだろ！ 襲撃されてる！」

「じゃあ、しっかり護衛してよね」

「じゃあ、武器を出してくれ」

シイノは携帯を取り出し、パスワードを入力した後、表示された文字列をいくつかタッチすると、また石像に額をくっ付けて動かなくなった。

銃撃は止むことが無い。容赦なく、教会のあちこちに穴ぼこを作っっていく。

目の前にハンドガンが四丁とサバイバルナイフが三本に、打刀が目の前に現れたかと思うと、一斉にガシャンと落ちた。シイノは二次元文字情報に変換しておいた武器を三次元立体化したのだ。

まず、ハンドガンを二丁拾い上げる。急に銃声が止んだので、ちらりと石像の陰から若者達を伺うと、皆さん揃いに揃って銃器のロードを行っている。ここぞとばかりに俺は飛び出した。しかしま

あ、なんと間抜けなことか。ろくに訓練も受けていないギャングと
いったところ。KGBも安い手を使ってくるな。いや、単に舐めら
れているだけかもしれない。そんなこんなの呆れが含まれたため息
を吐きながら、一気に間合いを詰める。

ようやくリロードを終えたみたいだが、ご愁傷様。近距離からテ
ンポよく、七つの頭に銃弾を撃ち込んでいく。若者達は皆、被弾し
た衝撃で空を見上げるような姿勢になり、後頭部から脳みそやら頭
蓋骨やら肉やらの破片を撒き散らせながら倒れる。

教会には、七つとその他諸々の死人と、腕や脚に被弾して苦痛に
悶えている人、運悪く数発被弾したり急所を撃ち抜かれたりと死に
かけている人、運良く無傷だった人、様々な人間が創り出す混沌の
中で、俺はくるかもしれない襲撃の第二波に備え、三次元立体化し
た武器をすべて拾い上げる。

シイノを見ると丁度石像から額を離れたところだった。次の瞬間、
シイノのとつた行動を見て、目を疑う。

「何を……している？」

シイノは自分の首を絞めていた。駆け寄って、手を首から引きは
がす。首には皮をえぐった爪痕がしっかりと残っている。今度は悲
鳴を上げながら、じたばたと暴れ出す。まるで何かにとり憑かれた
様に。

「落ち着け！」

シイノと自分、両方に向かって叫んだ。あまりにも突然の出来事
に頭は混乱するばかり。

暴れるシイノの手足を押さえつける。すると、シイノは自分の舌
を噛みちぎった。取れた舌先とその傷口から溢れる血が水溜まりを
作っていく。

冷静に。何度も自分にそう言い聞かせながら、とにかく止血を、
と着ていたマントを破き、その布を口の中へ押し込もうとした時、
急に抵抗が無くなった。

ふと、口元に手をやると、息をしていない。慌てて人工呼吸を試

みるが、口に溜まった血のせいで、上手くいかない。胸に耳を押し当てる。鼓動が聞こえない。

何故？ 大きく深呼吸をして、冷静に、その答えを探す。

ふと、頭を過る、存在秩序の性質。存在秩序が崩壊したとき、人間は発狂し、自殺する。俺はその崩壊した人間の末路を目の当たりにしたのだ。これは自殺なんてレベルじゃない。シイノという存在を自ら否定するかのように、全力で生きるのを止めていた。

シイノは音でその存在秩序が崩壊すると言っていた。しかし、音がしたとするならば、俺もそうになっていたはずだ。となるとやはり、答えはこの石像の中のサーバー、仮想現実にあるはず。シイノの二の舞になるかもしれない。だが、それ以外にいい案が浮かばない。

危険を承知で俺はシイノのように直接アクセスをしようと、額を近づける。その間に、携帯に一通のメールが届いた。直接アクセスする前にメールを確認すると、それはシイノからだった。

大詰

車の助手席から、窓の外を眺めていた。皆同じような面白みの無い建物の並ぶ景色が坦々と続く。

「シイノの代わりがあんたとはね」

俺は窓の外を眺めたまま、そうぼやいた。

「次の担当が決まるまでの代用としては、前任の私が適任だと思っかね」

隣で運転をしている彼の名前はマクシリア・ビーンドルフ。仕事の依頼を持って来て、必要があればそのサポートをする、言わばパートナー。そのシイノと同じ位置にいたのがこの男、マクシリアだ。「あーそうですか」

「まあ、今回の依頼が完了するまでは私が君の担当として付き添うことになった」

「なら、とつとと片付けて帰りたいよ」

俺は溜息を漏らす。

「相変わらず、つれないな」

「紳士的皮肉屋と自称するあんたには、うんざりしてるからな」

「ほう、私は随分と君に好かれているようだ」

シイノから受信したメールには、あの石像のサーバーにアクセスするなという旨とレイゲルの所在地を示す座標が書かれていた。

この大豪邸はレイゲルの別荘だそうだ。しかし、レイゲルが訪れることは殆ど無く、無人のまま、長いこと放置状態であったらしい。まあ、なんというかレイゲルがこれほどの大豪邸を築けるほどの金持ちだったとは。写真を見たときは質素な生活をしてそうな印象だったのに。人は見かけによらないな。

「本当に行くのか？」

後ろで、車マクシリアがから顔だけを出している。

「ああ」

「きつと、罨だぞ」

「手掛かりはこれだけだ」

マクシリアは眼鏡のを摘んで、微妙にずれた位置を調整した。

「……そうだな。死ぬなよ。君が死んで困るのは私なんだ」

俺はマクシリアに背を向けたまま頷いてみせた。

「それともう一つ、私は君の味方だ」

振り返りはしなかった。車の発音音が聞こえた。そのエンジンの音がだんだんと小さくなって、やがて消える。

豪邸はとにかく広く、そして、室内は埃だらけだった。玄関には普通に鍵が開いていて、誘い込まれたような、不愉快な感じが付きまとう。

ここは、どこかの巨大企業本社ビルか、VIP専用の超高級ホテルかと思わせる程の広く、そして豪華なロビーを歩いていると、何かが崩れる音がした。見上げると、砕けた天井が落ちてくる。慌てて安全な場所へと回避すると、重く砕ける音が響き渡り、埃が一気に舞い上がる。

埃が舞うその落下地点を見渡すと、驚くことに人影がある。あの砕けた天井と一緒に落ちてきたのか？ しかし、その人影は確かに立っている。

埃が落ち着きを取り戻し、視界が晴れて、その人影の容姿を確認できた。アンドロイドか、サイボーグか、普通の人間では無い。それだけは確かだ。

「君が、笹倉ハイヴ君かね？」

「ああ、あんたは？」

俺は、ハンドガンを取り出し、静かに安全装置を解除する。

「私がレイゲル・ポークラフだ」

その普通の人間ならぬ者は、そう名乗りながら襲い掛かってきた。勢いの良すぎる突進。ハンドガンで狙いをつける暇も無く、左へ口

ーリングし回避した。そのレイゲルが通った後に埃が舞い上がる。

「すまない。強制防衛システムだ。私の命を脅かすもの。つまり、君を排除するまで、身体が自由がきかない。意識のシャットダウンは何とか抑えることが出来たのだが……とにかく、時間が無い」

もう一度突進がくる。同じように回避して、今度は振り向きざまに脚に狙いを付ける。そして、引き金を引くが、弾丸が発射されない。カチカチと虚しい音が鳴る。それを見たレイゲルが、

「銃器使用不可領域だ」

と言って、両の手の甲から鉤爪のような刃を出す。こちらもハンドガンをしまい、腰に吊っていた打刀を鞘から引き抜く。

「君のことはシイノから聞いている」

レイゲルの身体は俺を切り刻もうと、手の甲から伸びる刃を振り回す。それを避けたり、打刀の刀身で防いだりと忙しい。

「シイノを知っているのか？」

「あの仮想現実の中で出会った」

隙を見つけて、正面に上段から面を取るように打刀を振り落とす。レイゲルの身体はそれを両手の刃をクロスさせて受け止めてくれた。から空きの腹を押すように蹴り倒す。

「シイノはどうして存在秩序が崩壊した？」

相手が体制を崩したのに乗じて、一太刀いれてやろうとしたが、受け止められた刀身を弾き返され、距離を取られては体制を立て直されるといふ始末。なかなかやりおる。

「何故、崩壊するか知っているか」

俺は首を横に振る。どうやって崩壊するかは知っているが、何故崩壊するかは聞いていない。

「何故崩壊するか、それは人間という存在を形成するために必要な情報の中の情報。すなわち、その情報の中に組み込まれたプログラムのことだ。その不具合、バグが崩壊の原因だ」

レイゲルの身体は最初の突進のように、凄まじいスピードで間合いを一気に詰めると、右手の刃で勢いに乗せた突きを繰り返す。そ

れを掠りながらも、なんとかかわすと、今度は左手の刃で真横に一閃、それもしゃがむようにして、なんとかかわす。すると、目の前には、膝が。ニー・キックをもろに顔面にくらった俺は、弧を描いて後方に飛ばされて、頭から不時着した。後頭部を強く地面に打ち付けた痛みには耐えながら起き上がる。

「知つての通り、超低周波音の中に存在秩序を崩壊させる音がある。現実はその音を作り出すことは不可能だが、仮想現実でなら、その音を作り出すことが出来る。そして、BMINを移植している人間が仮想現実には直接アクセスした状態でその音を聞くと、その人の存在秩序は崩壊する」

レイゲルの身体はまた、勢いよく右手の刃で突きを繰り返して行く。その刃は脇腹に刺さる。激痛に耐え、そのままの状態の下段に構えていた打刀を斬り上げ、左腕を斬り落とす。やはり、アンドロイドか。血管のように張り巡らされた細いコードと人工筋肉の繊維、鉄の骨組みが火花を散らしながら肩から断絶され、そこから先がボタツと落ちる。今度は上段から右腕を斬り落とす。肉を斬らせて骨を断つ、というやつだ。

レイゲルの身体はあきらめたように動かない。止めに中段から横に一太刀。腹筋から上が中身をばら撒きながらずれ落ちた。腰から下が立ったまま、残っている。

俺は膝と脚について、四つん這いの状態になり、脇腹の刃を引き抜くと、そのままレイゲルの上半身の隣に倒れこんだ。

「仮想現実には、その……音を出す兵器があるのか？」

俺は息咳荒く、声を絞り出した。

「ああ……彼らに奪われてしまった。私はもう用済みだ」

「“彼ら”だつて？」

KGBじゃないのか。俺は嵌められたのか？ ふと、マクシリアの「私は君の味方だ」という言葉が頭をよぎる。

「どういうことだ？」

「そう、彼らだ。名も無き影の組織。新しい技術の発展を阻止する

ためにはそれを上回る力が必要だ。私もそれに賛成していたが、間違っ……て、いた」

「シイノは……？」

「シイノ達は、それ……よく思わない、い、反対派だ。彼、らは……今、二つに、分断さ、れて……いる」

レイゲルの言葉が途切れ途切れになつてゆく。

「ここ、は……アクセス、空間……シイノ、待って……る。一緒」

そして、レイゲルの言葉は完全に途切れた。アクセス空間……シイノが待っている……一緒？

とにかく、ここからネットにアクセスしろということだ。俺は目を閉じる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7701v/>

存在秩序

2011年10月24日03時28分発行